

J. Jpn. Acad. Nurs. Sci., Vol. 41, pp. 449–457, 2021

乳児との対面接触による 妊婦の対児感情と不安への効果 ：ランダム化比較試験

Effect of Face-to-face Contact with Infants on Pregnant
Women's Emotions and Anxiety about Infants
: A Randomized Controlled Trial

園田 希¹, 高畑 香織², 堀内 成子³

1 宝塚大学看護学部

2 湘南鎌倉医療大学 看護学部

3 聖路加国際大学



この研究に取り組んだ理由 ①

1. 現在の日本の現状

少子化
核家族化

日常生活の中で乳児と
触れ合う機会が減少

母親たちへ
『育児不安』
が発生

産後
うつ病

乳児とふれ合う経験を持たない女性に対し、
育児不安を軽減する支援は周産期領域の喫緊の課題

2. 実際の臨床でのケア

臨床では…

- 映像教材を用いた指導
- 新生児のモデル人形を用いた指導
- 実際に乳児と触れ合う体験
などが行われている。

乳児との接触の方法、
乳児と触れ合うことでの効果は
明らかになっていない。

効果的な方法を明らか
にすることが必要。



この研究に取り組んだ理由 ②

研究①(予備研究)

研究者らは、妊婦が乳児に触れ合う体験「Mama's Touch」を実施。

研究①で分かったこと

- プログラム参加後の状態不安得点の低下の可能性。
- 乳児へのイメージの具体化の可能性。



研究①での課題

- 妊婦と乳児が接触する時間や方法, 内容を統一することができなかった。

今回の研究

研究①の課題を踏まえ、

- 妊婦と乳児との接触時間や内容、方法を規定。
- 妊婦が乳児と対面で接触するグループ(対面接触)と接触のない映像を視聴するグループ(映像群)の2群を比較する。
- 妊婦が乳児と触れ合うことによる効果を明らかにする。

研究の目的と仮説

研究の目的

初産婦が実際に乳児と触れ合うグループ（対面接触群）と映像を視聴するグループ（映像群）を比較し、仮説 1)、仮説 2)、仮説 3)を検証する。

研究の仮説

- 仮説 1) 対面接触群の介入前後での対児感情（接近得点）が上昇する変化量は、映像群にくらべて有意に大きい。
- 仮説 2) 対面接触群の介入前後での対児感情（回避得点）が低下する変化量は、映像群に比べて有意に大きい。
- 仮説 3) 対面接触群の介入前後での状態不安得点が低下する変化量は、映像群に比べて有意に大きい。

研究のデザインと研究参加への条件

研究のデザイン

乳児との対面接触群（乳児と触れ合うグループ）と映像群（乳児の映像を視聴するグループ）の2群を比較するランダム化比較試験。

研究の対象者の適格条件

妊娠38週台のローリスク日本人初産婦

- ▶ 年齢が20歳以上
- ▶ 児が単胎
- ▶ 経膈分娩を予定している
- ▶ 妊娠38週0日～妊娠38週6日に研究に参加可能

除外基準は

合併症妊娠や産科合併症を有する女性、精神疾患や内分泌疾患の既往がある女性、口腔内疾患がある女性、喫煙をしている女性、分娩誘発のセルフケアとして乳頭マッサージを行っている女性、授乳や沐浴・おむつ交換などで日常的に乳児を接触する機会がある女性、とした。

データ収集の内容（アンケートにて情報収集）

対見感情評定尺度

- ▶ 見に対するイメージを得点化することができる尺度。
- ▶ 接近得点と回避得点で構成されている。
- ▶ 接近得点は、見を肯定し、受容する方向の感情からなる14項目。
- ▶ 回避得点は、見を拒否し、否定する方向の感情からなる14項目。

状態不安得点

- ▶ 対象者が『今まさにどのように感じているか』を評価する不安存在尺度と不安不在尺度からなる。

対象者の基礎情報

- ▶ 年齢、不妊治療の有無、婚姻状態、きょうだいの有無、分娩予定施設
特性不安 など。

介入の方法

対面接触群

介入前の
アンケート

- 年齢
- 不妊治療の有無
- 婚姻状態
- 特性不安・状態不安
- 不安の有無
- 対児感情

乳児との触れ合い

- 乳児は生後2~6か月
- 乳児の観察
- 母親の教示のもと乳児の抱っこ



介入後の
アンケート

- 特性不安・状態不安
- 不安の有無
- 対児感情

30分間の介入

介入前の
アンケート

映像群

乳児の映像の視聴

- 映像は生後2か月の乳児
- 覚醒した乳児の映像
- 授乳中の乳児の映像
- 睡眠中の乳児の映像



介入後の
アンケート

時間の流れ

対象者のリクルート結果

適格条件を満たす初産婦 363名

同意が得られた初産婦 102名

Webシステムを用いて
2つの群へランダムに割付

対面接触群 51名

映像群 51名

脱落13名

脱落7名

介入をした人数

対面接触群 38名

映像群 44名

分析をした人数

脱落2名

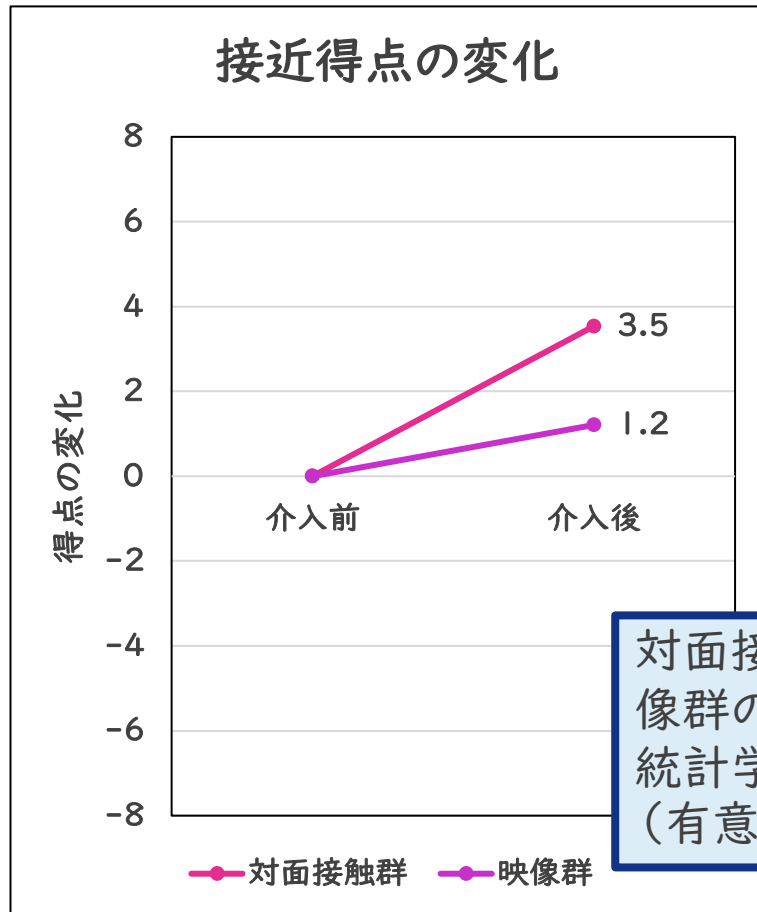
対面接触群 38名

映像群 42名

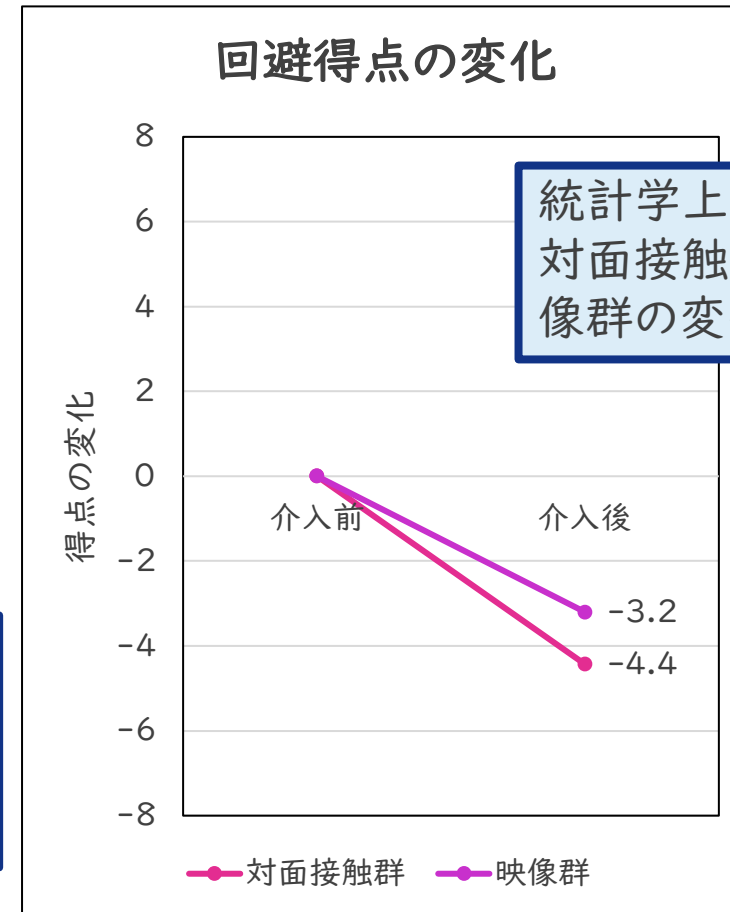
研究に参加した対象者の概要

基礎情報		対面接触群 38名	映像群 42名
年齢	平均値 [標準偏差]	32.4 [4.6]	32.6 [4.3]
不妊治療の有無	人数 (%)	8 (21.1%)	7 (16.7%)
婚姻状態	人数 (%)	38 (100%)	41 (97.6%)
きょうだいの有無	人数 (%)	23 (60.5%)	18 (42.9%)
パートナーとの同居の有無	人数 (%)	38 (100%)	41 (97.6%)
状態不安得点	平均値 [標準偏差]	37.0 [6.9]	40.3 [7.3]
特性不安得点	平均値 [標準偏差]	37.8 [7.2]	39.9 [6.7]
不安の有無			
育児に関する不安の有無	人数 (%)	34 (89.5%)	38 (90.5%)
分娩に関する不安の有無	人数 (%)	22 (57.9%)	26 (61.9%)
家族関係に関する不安の有無	人数 (%)	6 (15.8%)	6 (14.3%)
経済状態に関する不安の有無	人数 (%)	12 (31.6%)	12 (28.6%)
対児感情評定尺度			
接近得点	平均値 [標準偏差]	27.0 [6.5]	27.5 [6.9]
回避得点	平均値 [標準偏差]	9.9 [5.1]	9.7 [5.5]

介入前後での対見感情の変化



対面接触群の変化量は、映像群の変化量よりも大きい。
統計学上にも差があった。
(有意差あり)



統計学上差はないが、対面接触群の変化量は、映像群の変化量よりも大きい。

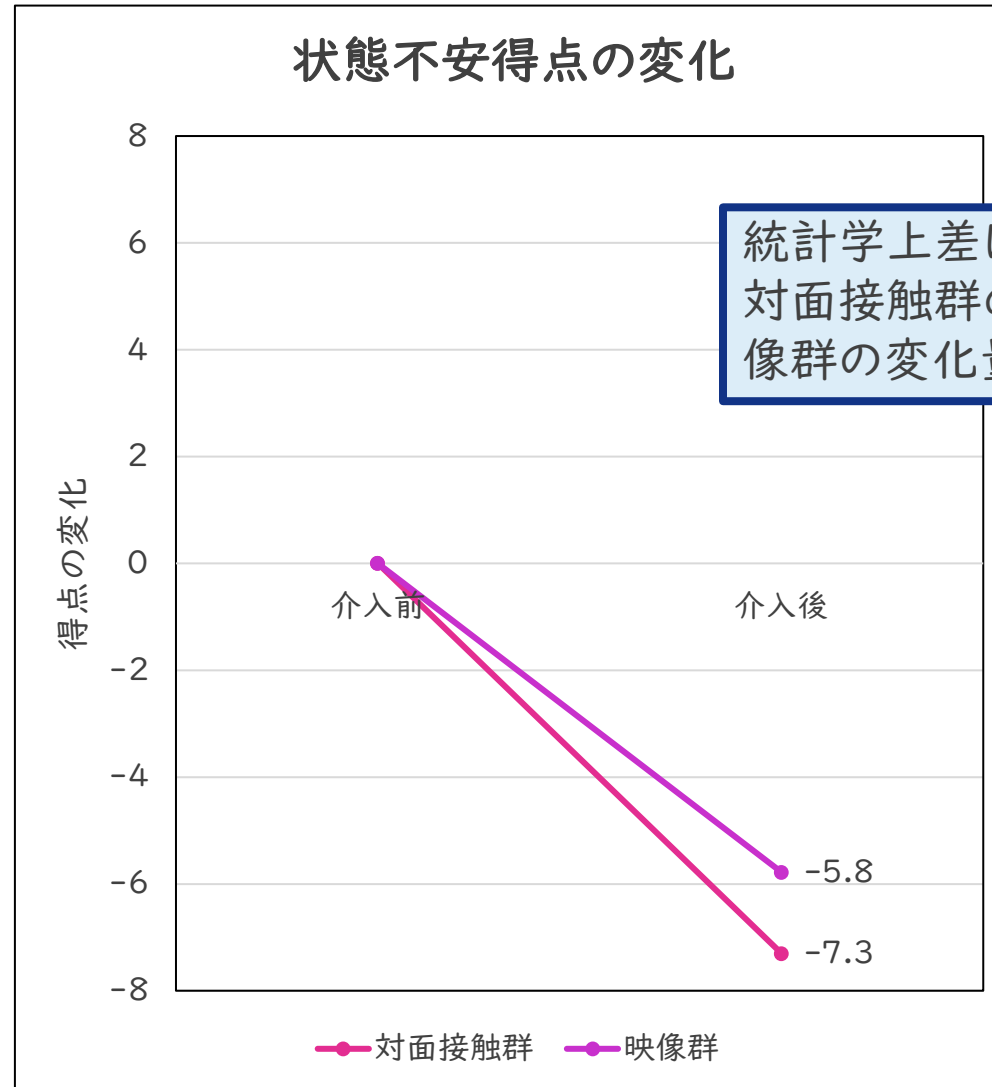
接近得点

対面接触群の変化量は 3.5 ± 3.5 点で、映像群の変化量は 1.2 ± 3.6 点だった。

回避得点

対面接触群の変化量は -4.4 ± 3.8 点で、映像群の変化量は -3.2 ± 3.5 点だった。

介入前後での状態不安の変化



統計学上差はないが、
対面接触群の変化量は、映像群の変化量よりも大きい。

対面接触群の変化量は -7.3 ± 4.6 点で、映像群の変化量は -5.8 ± 6.1 点だった。

この研究の結果からわかったこと ①

1. 対面接触群での乳児に対する肯定的な感情（接近得点）の介入前後での変化量は、映像群に比べて有意に大きい。
2. 対面接触群の乳児に対する否定的な感情（回避得点）の介入前後の変化量は、映像群との間で有意な差を認めない。
3. 対面接触群の状態不安得点の介入前後の変化量は、映像群との間で統計学上の差（有意な差）を認めない。
4. 介入後の前後比較においては、対面接触群だけでなく映像群においても、介入後の有意な接近得点の上昇、回避得点および状態不安得点の低下が確認された。

この研究の結果からわかったこと ②

実際の臨床への適応

- 乳児の生態を見聞きする機会を創造することが不可欠。
- 妊婦が乳児と映像にて接触することは、児への肯定的な感情の醸成、否定的な感情や不安の低下の可能性が存在している。
- 新型コロナウイルスと共存する社会において、初めて子どもを持つ初産婦への支援に、乳児との直接対面しての接触の機会だけでなく、映像での接触の機会もケアの1つの選択肢として検討していく必要がある。